神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Barojaの三部作“Lucha por la vida”についての試論- I

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 1968-07-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 木村, 榮一, Kimura, Eiichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2222

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Baroja の三部作 "Lucha por la vida" についての試論—I

木　村　栄　一

1900年「暗い生活」Vidas sombríasによって文壇に登場し，1902年の作品「完徳の道」 Camino de perfección の成功によって作家としての位置を確保した Barojaは，1904年かなり長大な三部作「生存の闘い」Lucha por la vidaを書きあげる。「探索」La busca,「悪草」Mala hierba,「曙紅社」Aurora rojaからなるこの三部作は，処女作の中にその萠芽がみられるものの，それ以後の四作品にはみられない特徴を備えており，多才な作家 Baroja の一面があざやかに開花した作品であり，また人間としての作者の抱いていた問題が提起されている点でも非常に重要なものとなっている。本稿ではそうした点に注意を払いつつこの三部作をとりあげてゆくことにするが，そのために，まず作品の生まれた時代の社会背景及び作者を素描し，次に三作品の梗概に入りその後で本論に移りたいと思う。

この三部作の時代背景は，十九世紀末から二十世紀初頭にかけてであるが，その当時のスペインは米西戦争敗北後のあらゆる意味で疲弊した雰囲気のもとにあった。支配者層の無能，腐敗堕落はいうまでもなく，一部の知識人を除いて国民の大多数は王政復古以来のうわべは安定した微温的生活の中にどっぷり浸りこみ，その精神風土は沈滞していた。政治，社会，経済面にはもちろん，国民生活の中にもはびこっていた casiquismo，地方主義は種々の点でスペインの近代化の妨げとなっていた。殊に農工業の立ち遅れは深刻な結果を招来することになった。というのは，十八世紀中葉からの人口増加のために，この頃になると農工業の生産が増加した入口に追いつかなくなった。

そのため農村の余剰人口は大都市に流れこみ，大都市は貧民であふれ返り，1900年の国内死亡率は他のヨーロッパ諸国平均の約二倍にまで上昇するという惨憺たる結果となったからなのだ。[1] Raymond Carr は当時のスペインを素描して，つぎのように述べている。

「十九世紀ヨーロッパの労働者社会の特徴は，都市生活の底辺部で多くの人々が苦しんでいることであった。スペインでは，都市の中に吸収される以前の移入者，乞食，街頭の物売りがその表われとなっていた。街頭販売は徐々に成長し，Madrid の中心部では零細な企業になり，第一次大戦前には大店舗にまでのし上がった。しかし街頭販売は小量でしか購買出来ない都市貧民と怠惰な人々にとって必要な供給機関として残った。新しい貧民達は大都市の周辺に生まれた掘っ立て小屋に住んでいた。在来の都市貧民と違い，これらのスラム街住民は大多数が教会の慈善事業の恩恵をこうむることがなく，また保険衛生施設を利用出来ず，都市に発生した死亡率の高いチフスの犠牲者となっていた。[2]」

こうした情勢のもとで祖国再興のために革新運動をおこした文筆家達が98年代とよばれることは周知のとおりである。Ganivet, Unamuno をはじめ，Maeztu, Azorín, Baroja, Antonio Machado などに代表されるこの世代は個人主義的傾向が強く，こうした運動も統一のとれたものとはならなかったが，1902年頃には Maeztu, Azorín, Baroja の三人が軌を一にして活動したことがある。これも見解の相違から1905年頃に分裂してしまうのだが，ここにとりあげる三部作の生まれた1904年といえば分裂寸前の，三人の結束に大きな亀裂の入った時期であることは疑いない。（彼等三人の結束の誕生からその分裂までの消息については，Luis S. Granjel の「98年代展望」Panorama de la generación del 98 Madrid, 1959. Edics. Guadarrama. に詳しいが，Azorín の小説「意志」La voluntad, 1902 の中にも，いささか皮肉っぽい

(1) Raymond Carr; Spain 1808–1939, Oxford, 1966; p. 413.
(2) op. cit., p. 438–439.

調子で描かれている。また，この三部作のひとつ「探索」の中では，Manuel, Vidal, el Bizco の三人が組んでこそ泥を働くところがあるが，これも Sebastián Juan Arbó の言葉によれば，先の三人のカリカチュアとなっているとのことである。(3) 彼等三人の活動がさして社会的な反響をよばず，さらには Unamuno への呼びかけも丁重に断わられ，その上に結束にひびが入りそれが日毎に大きくなってゆくという事態は，自ら進んで加ったのではない Baroja にとっても些事とみすごすわけにはゆかなかったろう。いや，むしろ生来懐疑的で個人主義者の彼が，こうした事情からいっそうその傾向を強めていったことは間違いあるまい。

先に記したような世紀末から初めにかけての首都を舞台に三部作は展開するが，以上のような作者個人の問題を反映してか，前年の作「ラブラスの長子」El mayorazgo de Labraz よりもはるかに全体の色調は暗くペシミスティックである。また，大衆への働きかけが挫折に終ったため，いっそう懐疑的，個人主義的な性格も強まっているようである。

次いで三作品の梗概に入るが，その前に少しのべておかねばならないことがある。作者が挿話を好む傾向のあることは，しばしば指摘されている通りだが，これらの作品では主人公そのものよりも下町に生きる人間達の姿に焦点が合わされていて，これまでのどの作品よりも挿話を好む傾向がつよく表われている。そのために，物語り小説としての性格をもちながらも，いわゆる物語り小説作品のほとんどすべてを通じていえるような求心的なストーリー展開をみせてはおらず，挿話から挿話へと転々しどちらかといえば遠心的なストーリー展開となっている。この点に関しては，先でもう少し詳しく検討を加えるつもりである。この三部作をとりあげ，「ありのままに捕えられた人生の瑣末で断片的な観察から成る小説を要約するとか語るとかすることは，いずれにしても不可能である。」("Imposible de todos modos resumir o

(3) Sebastián Juan Arbó; Pío Baroja y su tiempo, Barcelona, Edit. Planeta, 1963; p. 344.

"contar" una novela compuesta íntegramente de observaciones minuciosas y fragmentarias de la vida captada al natural."[4]) とのべている批評家もいるように，その梗概といっても容易ではないが，中心人物の Manuel と Juan を軸に一応のあら筋をたどってみよう。

「探索」—La busca

地方の叔父の家で育てられていた Manuel は，Madrid の下町の下宿屋で炊事婦をしていた母のもとにやって来る。そこでしばらく母の手伝いをするが，下宿人と騒動をおこして追い出される。母は仕方なく Manuel を Manzanales 川に近い貧民街にある靴屋の叔父のもとへ奉行に出す。Manuel は仕事に精を出す一方，同じ仕事をしている叔父の息子 Leandro, Vidal と親しくなってゆく。そのうち彼は Vidal を通して，あたりに住む少年達のグループに入り，その頭目格の el Bizco を知る。しばらくそんな生活が続いた後，Leandro が三角関係のもつれから恋人の la Milagros を殺害し，自らも命を断つという事件がおこる。Manuel の心に暗い影を残したこの事件は，叔父が床につく機縁ともなった。そのため靴屋は閉鎖され，Manuel は Patas おやじの八百屋に移る。だが，そこでは仕事を教えてくれず，間もなくやめてパン工場に働きに行く。夜の十一時から朝の十一時まで，燃えるようなかまどの側で働くという苛酷な労働のため身体をこわし，母の下宿にもどって静養する。しばらくして良くなりかけた頃に，下宿の女主人の姪とごたごたをおこし，またしても追い出される。行くあてもなく困りぬいた Manuel は，Vidal や el Bizco のいつもたむろしている場所にゆき，二人から三人組を作ろうともちかけられる。断りきれず加わったものの，決しかねているうちに，母が病気で倒れたという知らせをうけとり，下宿屋にかけつける。看病の甲斐もなく母は亡くなり，Manuel はいよいよ行くあてがなくなり，浮浪児達の群に入る。そうしているうちに，Vidal と el Bizco と組んで生きて行こ

(4) Eugenio G. de Nora; La novela española contemporánea (1898–1927), Madrid, Edit. Gredos, 1963; p. 156.

うという決心がつき，彼等のもとにゆく。三人は Madrid の郊外でけちな窃盗などして，しばらく暮すが，Manuel と Vidal は el Bizco に我慢出来なくなり逃げ出す。その後ちよっとした曲折があって，Manuel は Vidal と別れ，再び浮浪児の生活にもどる。そのうちに，ふとしたことで屑屋のおやじ Custodio にひろわれる。そこの小僧として働いているうちに屑屋の仕事に愛着をおぼえ，ゆくゆくは自分も屑屋になろうと考える。ある日，裁縫師の見習い出ていた娘の la Justa が戻ったのをみて，心をときめかす。気をひくような彼女の態度に，Manuel はすっかりのぼせ上るが，彼女は羽ぶりの良い肉屋の息子を連れて帰り，家族の者に紹介する。二人の交際は進み，結婚にまで話が進む。一方，Manuel はひどく気をおとすが，結婚式の日までは屑屋にいようと決心する。ある日，彼女の友達の結婚式に付きそって行ったところ，ちよっとしたことから彼女の恋人ともめ，袋だたきにされる。すっかり惨めな目にあわされた Manuel は怒りにふるえ，二度と屑屋にも戻るまいと心に誓い，その夜は町中をさまよい歩く。真夜中頃になって，工事現場のたき火の側にむらがっている浮浪児達の中にまぎれこみ，うとうととまどろむ。ふと話声がきこえ，耳をすますと，火にあたっていた老人が警官にむかって「こういった連中はもうまともな人間じやない。」といっている言葉が耳に入り，びっくりする。起き上って夜の町を暁方までさまよい歩きながら，お日様のもとで働いて，まっとうに生活を送らなければいけないとしみじみ考える。（こうした主人公の波瀾に富んだ生活を通して，後の二作にも登場する Roberto Hasting, don Alonso, 男爵夫人 Paquita Figueroa などの人物が姿をみせる。）

「悪草」—Mala hierba

まっとうな暮しをしようと決心した Manuel は，これまで何かと忠告助言を与えてくれた Roberto の居所をつきとめ会いにゆく。彼の世話で彫刻家 Alejo と相部屋にしている所に割りこませてもらう。生活を支えてゆくために苦闘する Roberto は，Manuel に仕事を探して働くように忠告するが，

Alejo やその芸術家仲間となじんで一向働こうともしなかった。そのうちに仲間のひとりが写真店を開くことになったのを機に，そこで働くことになるが，もめごとがあってしばらくでやめる。その後，Alejo の友人が職業紹介業をしている Mingote のもとに彼を連れていってくれる。数日の間，雑用をしていたが，突然 Mingote が彼にむかって男爵夫人の子息になるんだと言い出す。わけの判らぬままに連れられて男爵夫人のもとにゆくが，その夫人というのは驚いたことに以前母の下宿に居たことのある Paquita Figueroa だった。話はうまくまとまり，Manuel は無事その男爵夫人の息子におさまるが，その裏には彼を使って夫人の昔の愛人 Redondo を相手に一芝居うち，金をまきあげるという計画があった。彼等のうった芝居はものの見事に成功し，金づるをつかむことになる。しかし，Mingote との仲間割れから窮地に立った夫人は，Redondo にもちかけて田舎の家を借りてもらい，娘の Kate と Manuel を連れて移り住む。数ケ月すると Redondo からの送金が途絶え，にっちもさっちもゆかなくなる。仕方なく家財を売り払って Madrid に戻るが，無一文でどうにもならず，夫人は田舎にいる義兄に救いを求め，その間は Kate の働きで何とか糊口をしのぐ。数日後返事を受けとった夫人と娘は，Manuel に名残を惜しみつつ別れる。彼女達が Madrid を発つ日，Kate に想いをよせていた Roberto が見送りに来るが，Manuel がひとり取りのこされたのをみて，印刷所に勤め口をみつけてやる。そこで働いている間に植字工の Jesús と親しくなり，彼と同じ下宿に入る。（そこでの生活を通して，孤児の la Salvadora とその弟の Enrique が Jesús の妹 la Fea にもらわれるという挿話が入る。この la Salvadora は後に Manuel の妻になる。）単調で厳しい印刷所の仕事にすっかり厭気のさした Jesús は，Manuel をさそって遊びにゆくが，その後二人ともずるずると怠惰な生活に入りこんでしまい，はては下宿を追い出される。次の日，Manuel は以前の知り合いで人形使いをしている don Alonso にひょっこり出会い，三人であちこちの救済院や空屋を泊り歩く。教会が寝ぐらに丁度いいと気づいた三人は，その後ある教会

に寝とまりするが，僧の通告で，うまく逃げおおせた Jesús を除いて二人とも捕縛される。牢に放りこまれてから，Manuel はうまく機転をきかせ無事釈放してもらう。牢は出たものの行くあてもなく，ぼんやり建物の入口に腰をおろしていると乞食が来てそばに坐り，いろいろと身の上話をきかせる。あてもなかったので，その乞食と掘っ立て小屋で一夜を明かすが，暁方銃声がきこえ驚いて起きる。通行人の話から自殺だと知った二人は現場にゆくが幸いあたりに人影はなくまんまとその持物をかすめとる。盗品を処分するため乞食の昔の知人のもとにゆくと，その秘書として来たのが Vidal だった。思いがけぬ遭遇にびっくりするが，ともかくその夜は彼の世話で一夜の宿をとる。次の日，Vidal は彼に賭博屋の仕事があるがやってみないかともちかける。迷いはしたが別にすることもなかったので承諾する。しばらくするうちにその仕事がたまらなく厭になるが，他にすることがなく仕方なしに続ける。そうしているうちに，今では娼婦にまで落ちぶれていた屑屋の娘 la Justa とひよっこり再会し，そのまま二人で同棲生活をする。何とかその泥沼のような生活からぬけ出そうと考えるが，いざそのために何かしようとするとおっくうになりずるずると荒んだ生活を続ける。Manuel が，Vidal と彼の仲間の Calatraba，それに夫々の女との六人連れで郊外に遊びに出た一日，かねてから Vidal をつけ狙っていた el Bizco が現われ，Vidal を殺して遁走するという事件が起った。その事件にすっかり仰天した Manuel はまっとうな生活に戻る決心がつき，印刷所に働きに出る。一方 la Justa はそんな Manuel にすっかり愛想をつかし姿をくらます。悪いことは重なり，間もなく Vidal の事件で逮捕され，牢に入れられる。観念した Manuel は知っていることを洗いざらいぶちまける。一方，賭博屋の方では有力者に手をまわし，Manuel の釈放を余儀なくさせるが，裁判所の方では釈放に際し，el Bizco の逮捕に協力するという条件をのませる。彼と組むことになった刑事 Ortiz は，la Fea やla Salvadora をよく知っており，彼女達の下宿に居て，必要な時だけ同行すればよいという許可を与える。二人であちこち駆けまわるが，el Bizco

の足どりはつかめず毎日が徒労に終った。ある日，捜索に疲れて戻ってみると，Jesús がおり，彼は Manuel が警察の手の者と昔の仲間を追っていることを厳しくとがめる。その言葉にうごかされ，Manuel は賭博屋に出かけてゆき，この仕事をやめられるよう警察に手をまわして欲しいといって無事話をつけて帰る。その後 Jusús と二人で散歩しながら夢のような理想の世界について語り合う。

「曙紅社」—Aurora roja

プロローグにおいて，Manuel の弟で神学生の Juan が禁書を読みあさり，神学校という狭い世界にあきたらなくなって未知の世界に出び出してゆく過程が描かれ，その後多少紆余曲折のあった後の Manuel 達が描かれる。

今では Manuel は姉の la Ignacia と la Salvadora と一緒に暮していた。彼が印刷工として働く一方，la Salvadora は la Fea と共同で経営している雑貨店の収入と，刺繍教室での教授料を入れていたので結構気楽な暮しをしていた。雨のふるある日，何ひとつ音信のなかった Juan がひよっこり Manuel を訪ねてきた。思いがけない再会にびっくりした Manuel は，弟にそれまでの経過をいろいろ尋ねる。Juan はパリで美術を学び，彫刻家として立ってゆこうと戻ってきたのだった。Juan は la Salvadora の魅力的な顔をみて是非像を作らせてほしいと頼む。一月ほどでそれが完成し，展覧会に出したところ大好評をうける。その像は展覧会の選考で三位に入り，賞金をうけとることになるが生来潔癖な Juan は賞金を受け取りたくないと Manuel にもらす。Manuel はかねてから何とか自分で印刷所を経営したいと考えていた矢先なので，Juan にその賞金をまわして欲しいと頼む。その賞金に la Salvadora と la Ignacia の貯金を加えても，店を開く資金にはほど遠かった。二人の女は Manuel の尻をたたいて Roberto に借りにゆくようにすすめ，彼は仕方なく出かけてゆく。Roberto はその申し出を快くうけ入れてくれたので，さっそく印刷所を開くべく大奮闘し，やっとのことで開店までこぎつける。だが一向に注文はこず，そのうちに無理がたたったのか Manuel は床

につく。しかし印刷所の方を放っておくわけにも行かず，友達の Jesús にまかせる。病床にある間，la Salvadora は献身的なまでに彼に尽すが，その姿をみた Manuel はほのかな彼女への愛がはっきりと形を取ってゆくのを感じ，彼女との結婚の意志をかためる。

病気もよくなったので，Manuel は印刷所に出てみると，Jesús を先頭に職人達は馬鹿騒ぎをしていた。Manuel は驚いて皆をしかりつけ仕事につかせる。そんな彼にむかって Jesús は「お前は下劣なブルジョワだ」といって責めるが，何とかなだめる。

一方 Juan は芸術家達と交際し彼等を知ってゆくにつれて，その人間性に失望する。そんな時，新聞記者の通称 el Libertario と知り合い，自分の中に芽生えていたアナーキズム思想が彼との交際を通して明確な形をとってゆくのを感じる。El Libertario のさそいでアナーキスト達の会合に加わるようになるがそのうち会も大きくなり名をつけなければいけなくなった。そこで集会場になっていた酒場の「曙亭」の名をとって「曙紅社」という名がつけられる。Manuel も Jesús にさそわれてその会合に出るようになるが，仕事の方は着実に伸ばしてゆき経営も軌道にのり出す。ある日 Roberto が仕事の話をもって来たついでに，Manuel といろいろ議論し忠告を与える。その後，仕事が厭になった Jesús は，墓場荒しをし，身が危なくなってタンジールに逃げる事件や，el Bizco が捕えられること，並びにその逮捕に協力した don Alonso の死などの挿話が入る。

Juan はますますアナーキズムに深入りしてゆき，その活動に全身全霊をうちこむようになる。婦女子や労働者など弱い人々のための理想郷実現のために自らを賭け，ひたすら邁進する Juan は身体を悪くするが，医師の勧告に全く耳をかそうとはしなかった。病身の Juan がアナーキストの講演会で美しい演説をしたり，偶然知り合った幾人かの浮浪者を立ち直らせようとして失敗するといった事件がその後挿話的に続く。

一方，官憲はアナーキストの指導者的な位置にある Juan をおとし入れよ

うと謀略をめぐらせるが，Manuel, la Salvadora それに友人達の協力で難をのがれる。その事件も終り一段落ついたある日の夕方，Roberto が来て英国にもどることになったが，ついては印刷所の権利はすべて Manuel に譲る，なお la Salvadora と早く結婚するようにとの忠告を与える。突然の話で驚くが，その贈り物と忠告を素直にうけ，la Salvadora にそのことを話し，二人の結婚を決める。

彼等が結婚したからといって，家の方は別に変ったことはなかった。ただ彼等を悩ませたのは Juan のことだった。国王の戴冠式が近づくにつれ，病気で身体が憔悴しきっているのに，熱にうかされたように方々を駆けめぐっている Juan の姿に二人は何か異常なものを感じてはいたが，なすすべもなかった。Juan の様子からアナーキスト達が戴冠式のパレードの途中に事を起そうとしているに違いないと考えた Manuel は，戴冠式の当日恐ろしい予感にかられて群集でごった返す Madrid をあちこち探しまわる。やっと Juan をみつけ，多少面倒があったものの事なきをえて連れて帰るが，途中 Juan はとうとう喀血する。憔悴しきった身体をその一日に賭け，精神力でもちこたえてきた Juan にとってアナーキスト達の決起をみなかったことは致命的な打撃だった。兄夫婦の看護や医師の力もむなしく，Juan は果されなかった美しい理想郷の夢を抱きつつ彼岸の人となる。

以上ごく大雑把ではあるが，三作品の梗概を記した。そこで，この三部作の構成をみてゆくと，上記の梗概でも気づかれると思うが，「探索」と「悪草」は完全に連続した作品となっているのに，「悪草」と「曙紅社」との間には数年の時間的空白があり，しかも Juan が中心人物として加わっている。またストーリーに重点をおいて記したため，梗概では殆んどふれなかったが，その内容にもかなりの変化がみられる。すなわち，先の二作品では Manuel を通して米西戦争後の首都の下町の貧民達を描出しようとしているのに比べ，「曙紅社」では都市労働者の抱いていた社会思想を忠実に記録しており，さらに Juan と Roberto という人物を対峙させて，そこにいかに生きるべき

かという作者自身の抱いていた問題を提起している点で，先の二作よりも思想的傾向が強くなっているのである。

Sebastián Juan Arbó によれば，[5] 先の二作品「探索」と「悪草」は "El Globo" 紙に掲載されていた新聞小説だったのを，一作品としては長大すぎるため二作品に分割したもので，それに「曙紅社」が加えられてこの三部作が生まれたとのことである。それゆえ上にのべたような，三部作の構成，内容にみられる差異はこのことから生じていると考えられる。

本稿でこの三部作をとりあげる場合も，一応先の二作品と「曙紅社」とをわけてみてゆくことにする。しかし，Eugenio G. de Nora の言葉にもある通り，[6] これは Baroja の初期の三部作の中では最も緊密な結びつきをもつものだけにこの分割も暫定的なものにすぎず，論旨が両者にわたる場合のあることはやむをえない。

以上のような分割に従って，「探索」，「悪草」と「曙紅社」を別々にみてゆけば，それぞれの序言とプロローグが非常に示唆に富んだものとなっていることが判る。そこで先ず，「探索」の序言をみてゆくと，

「ゆるやかに，しめやかに，おごそかに廊下の時計が十二時をうち終えた。」("Acababan de dar las doce, de una manera pausada, acompasada y respetable, en el reloj del pasillo.")[7]

という書き出しで，読者の関心をまず漠然とした時間と空間にひきつけ，次いで上記の時計と，近所の時計と教会の時計の時報がちがっていることにふれて，

「三つのうちどの時計があっていたのであろうか。時をはかるあの三つの器械のなかでどれが最も正確だったのであろうか。遺憾ながら作者には確かなことはいいかねる。遺憾ながらといったのは，時間とはある謹厳なる哲学者によれば，我々が生活の愚しい営みを織りなしてゆく刺繍布であるとのこ

(5) op. cit., pág. 349.
(6) op. cit., pág. 152.
(7) Pío Baroja; Obras completas I; Madrid, Biblioteca Nueva, 1946; pág. 257.

とだからである。それに，この書物という刺繍布がいかなる時点から始るのかをしかと定め得ないことは，まことに非科学的である。」（"¿Cuál de los tres relojes estaba en lo fijo? ¿Cuál de aquellas tres máquinas para medir el tiempo tenía más exactitud en sus indicaciones? El autor no puede decirlo, y lo siente. Lo siente, porque el tiempo es, según algunos graves filósofos, el cañamazo en donde bordamos las tonterías de nuestra vida; y es verdaderamente poco científico no poder precisar con seguridad en qué momento empieza el cañamazo de este libro."[8]）

という文に移り，その後にこの真夜中の詩人や売笑婦や博打うちなど様々な人間の営みが素描されている。

小説が一種の歴史であるとすれば，時間的なものである。それが物語り的な性格をもてば（あるいは，フォースターのいうように「そして（……）それから」という形式をとれば，と言いかえてもよいが），時間の順序にしたがうものであることは言うまでもない。このような点から，上にあげた作者独特のシニズムがこめられた「時間とは，（……）我々が生活の愚しい営みを織りなしてゆく刺繍布」という言葉と「この本という刺繍布」という言葉を考えあわせてみる時，この作品がまぎれもなく物語り的な性格をもつものであることが明らかになる。さらに付け加えれば，この引用から人物達がそれぞれの色と形で織りつづった刺繍布がこの作品であるともいえよう。以上序言を通してこの作品の総体的な性格を瞥見したがついで作品の状況設定に視線をむけて，それと「生存の闘い」というテーマとの絡み合いをみてゆくことにしよう。

すでに述べたように，作者の視線は首都の下町，すなわち華やかな光彩を放つ大都会の影になった惨めな底辺部にむけられていて，そこでは日夜悲惨な環境のもとで，生きるための闘いがくり返されている。主人公が叔父の靴屋で働いていた時に入居した Rilo おやじの下宿とそのあたりの描写を引用

（8） op. cit., pág. 257.

してみると。

「そのボロ下宿は，うじ虫の巣のように熱つぽくもぞもぞと蠢く小世界だった。そこで人々は働いたり，怠けて遊んだり，酒をのんだり，腹をすかせたり，餓え死にしたりし，またそこで家具が作られ，古美術品が贋造され，年代ものの刺繍が補修され，安物の菓子が作られ，こわれた陶器が修復され，盗みの密議がこらされ，女達は身を売っていた。」 ("Era la Corrala un mundo en pequeño, agitado, febril, que bullía como una gusanera. Allí se trabajaba, se holgaba, se bebía, se ayunaba, se moría de hambre; allí se construían muebles, se falsificaban antigüedades, se zurcían bordados antiguos, se fabricaban buñuelos, se componían porcelanas rotas, se concertaban robos, se prostituían mujeres"[9])

目くるめくばかりに激しい調子でここに描き出された世界は，もはや人間世界というイメージを呼び起こしはしない。まぎれもなく人間の営みが描き出されているのに，我々の脳裏にはむしろ動物的な世界のイメージがうかぶ。「うじ虫の巣のように熱っぽくもぞもぞ蠢いている小世界」という表現から，作者が人間を動物的な存在として把握していることは伺がえるが，さらに下の「女達は身を売っていた」という表現においてそのことはいっそう明らかになる。すなわち，それまでの文では「家具」や「古美術品」が主語となっているのに，ここでは人間が主語になっているが，このことはとりも直さず作者が事物を扱うのと同じ平面で「女達」，すなわち人間を取扱っていることを物語っている。以上のことから，作者が極限状態にある人間を動物的なものとして把握していることは明らかである。

小説の中で「生」という問題を提起するには，いろいろな方法があろう。例えば，小説家としての Unamuno は「死」という対立概念を通して，その形而上的な意味を追求しようとしており，一方 Azorín は繊細微妙な形で自己と密着した「生」を語り，追求しているという言葉がふさわしくないとさ

(9) op. cit., pág. 288.

えいえるほどである。 Baroja の場合，ことにこの二作品では，一面で瞑想的な態度，もしくは徹底した観察者としての態度を保持しながらも，現実そのものへの真摯なアプローチがはるかに強く表われており，また詳細な観察を通して人生の断片をよせ集め，それをふるいにかけ選択を加え可能な限り客観的な形で提示しようとしている態度がはっきりと伺がえる。このような作者の姿勢を反映して，ここに描かれるのは現実世界の中でぎりぎりの線まで追いつめられた人間達の具体的な「生」なのだ。彼等にとって「生」とは，形而上の問題でなく形而下の事柄なのだ。権力者やブルジョワジーが，虚名，権力，経済力で自らを武装しているとすれば，彼等貧民達は何ひとつ身にまとう武器もなく，赤裸々な姿で生存に従事している。そこにあるのは，日常的で具体的な「生」ではあるが，種々の条件のもとで悲惨な形態をとっている。

「生存競争」という言葉を純粋に生物学的意味で捉えた場合，それがそのままの形で人間世界にあてはまるかどうかということには問題が残るにしても，人間が本来霊的なものと獣的なものとの二面を備えた存在であり，極限状態におかれた場合には，その獣性がしばしばより顕著な形であらわれることは周知の通りである。そうした人間の世界を律する法則として「生存競争」がもち出されているのであり，ここに作者の意図があることは容易に判断されえよう。すなわち，状況設定と三部作のタイトルとはこの点で深く絡みあっているのである。

以上先の二作品の基本的な性格とそのテーマを概括的にのべてきたが，このことを足場にしてもう少し詳しく二作品の性格を追求してみることにしよう。

そこで，人物を通してみてゆくことにするが，主人公に先ずスポットをあててみよう。すでに述べたように，主人公には Manuel が一応設定されている。ところがこの人物を捕えようとしても捕えどころがなく，ごく漠然としたイメージしか喚起しないし（このことは,「曙紅社」においてもいえること

である)。これは彼の行動がほとんどの場合外部の力によって始動したものであること(作中で Manuel がしばしば「ほかにしようがない」となげやりな調子で言うが,このことは端的に彼の行動力を欠いた性格を物語っている)に多く依存しているが,同時に彼の内面が描き出されることがなく,いわゆる内的発展をみせない人物となっているためでもある。物語り小説が人物の内面にでなく,プロット自体に重きをおいたものであることは周知のとおりであるが,その場合人物を固定化しそれにのっとってストーリーを展開させてゆく手法が正統的なものであることはディケンズにおいてすでに明かな通りである。Manuel もそうした点から眺めてみれば,人物像としては固定されており,とりも直さずこの作品の物語り的性格をはっきり証明している。たが,ここで注意しなければならないことは,近代小説においてはそうした人物設定を通してのストーリー展開が,概ね多少の起伏をみせながらも結末へと求心的に進んでゆくのに比べ,この二作品では唐突な感じを抱かせるほど激しい局面の変化,挿話的事件が続き,ストーリーの展開が結末にむかって求心的な形で進んでいないことである。このことからも,推察される通り,作者は主人公自身の運命に力点をおいてはおらず,むしろ彼をとりまく世界,人物あるいは事件を語ることに力点をおいている。それゆえとても要約出来ないほど錯雑したこのストーリーの展開は,ドストエフスキィにおけるような迷路のような性格をもちながらも,ひと度そこを通りぬければ全体の緻密な構成が鳥瞰できるといったものでなく,主人公を無色の縦糸にしたて,それを軸に人物,挿話といった図柄を織り込もうとした作者の創作態度を反映したものなのだ。このことはまた作者の事件,人物への執着を物語ってもいるのである。以上のことから考えて,作者は必ずしも Manuel という人物を描き出すことにこの作品の生命をかけているのでなく,むしろ彼をカメラ的存在にしたて現実という海に投じ,その無限の相貌の断片や,そこに遊泳する人間達や,そこにくりひろげられているドラマを写し出そうという意図を抱いていたに違いない。(もちろんここでいうカメラ化という言葉

は，フランスのヌボー・ロマンでよく用いられるそれとはかなりの開きがあることはいうまでもない。）ここでもう一度 Manuel が漠然としたイメージしか喚起しない人物であるということを考えてみれば，それは作者が彼をカメラ化，すなわち非個性化，透明化した結果であると考えられる。試みに Baroja の創り出した他の人物達，例えば Fernando Ossorio, Andrés Hurtado, Zalacaín, Shanti Andía などを思い浮べてみればその相違は明らかである。

自然という壮大なドラマの中では，個々の存在が決して主人公とはなり得ないように，人間世界のドラマにおいても，個人はその主人公になることはない。しかし反面において，それぞれ人間は少くとも自己の人生の主人公であることも真理である。「冒険家サラカイン」Zalacaín el aventurero, 1909 において，作者は個人の壮烈なドラマを描き出そうとしたのだとすれば，この三部作，ことに先の二作品では社会の底辺部の人間達を描き出そうとしたのであり，Manuel の影のうすい性格もまさにこの点に由来している。この二作品の主人公とは，個人でなく作者が描き出している人物すべてなのだ。いいかえてみれば，Manuel を縦糸にし，種々雑多な人間達の図柄を小説という布に刺繍しようとしたのであり，さらにその奥には悲惨な状態にある人間達を動物的な存在とみなすことによって，その世界の根底に「生存競争」という苛借ない法則のひそんでいることを暴き出そうとする作者の意図がひめられている。

Baroja が十九世紀末の科学がすばらしい発展をとげ，未だあらゆる可能性を内包していた時代に医学を学び，ダーウィンの思想に強い影響をうけていることと，上にのべたことを考えあわせてみれば，この作品にみられる数多くの人物，事件，挿話には，自然科学者が集めた標本を提示するのにも似た性格がうかがえ，しかもそれが客観的な表現で提示されていることから，当然フランスの自然主義との結びつきが頭に浮ぶ。Engenio G. de Nara がこの三部作のタイトルをとりあげ「自然主義的な酷薄冷徹な厳しさ（これは，感情が生起しても，純真すぎないようにとそれをいつも押し隠す人間特有の

ものなのだが）をそれとなく伺がわせるダーウィン的なタイトル」（"título darwiniano que insinúa ya el frío y brutal rigor de naturalista (de hombre que en todo caso esconde sus sentimientos, si los tiene, por no aparecer ingenuo"[10]）と述べた時，彼の脳裏にはそうした考えが浮かんだに違いない，さらに，Baroja が医師の経験があったことと，ゾラとクロード・ベルナールとの結びつきとを考えてみれば，そこに動かしがたい定式すら浮び上るように思われる。（未完）

(10) op. cit., pág. 152.